

認められなかった。ただし平面分布にはグループごとに型式学的特徴のまとまりが認められ、晩期中葉後半の極めて限定された時間幅における様相を示しているといえよう。

次に有文深鉢のうち主文様部分に磨き調整が施される1～4類について見ると、1類234は上位包含層Cグループブロック3に属し、口縁部の集合短沈線は上野原～鳥屋1式に認められる施文である。2a類117は調査区南側2K-2G21グリッドに単独で位置するSK295出土である。上野原遺跡での出土が認められ〔中島前掲第24図26〕当該期に位置づけられる。2b類22・39は土坑出土であるが、図版44のb～dラインを見ると下位層の分布域に属している。22のような平行沈線の多条化は新しい傾向であり上野原式直前～上野原式に比定できよう。平行沈線文帯のみが施される3a・b類は上位包含層と下位層の分布域から出土しており、当該期に比定され则认为する。3a類130と4類90については類似資料が緒立遺跡B地区の配石遺構から一括出土しており〔渡邊ま1998〕、上野原式の浅鉢と共伴している。本遺跡の出土状況と矛盾せず、当該期の組成の一端を表しているといえよう。

B 粗製深鉢の分析

本項では地文深鉢の他に、地文深鉢2・4類の口縁部無文帯に沈線文・刺突文が施される有文深鉢5類と、口縁部に粘土紐接合痕をのこす、または沈線でなぞる有文深鉢6類もここに含め分析する。

1) 類別組成 (第38図)

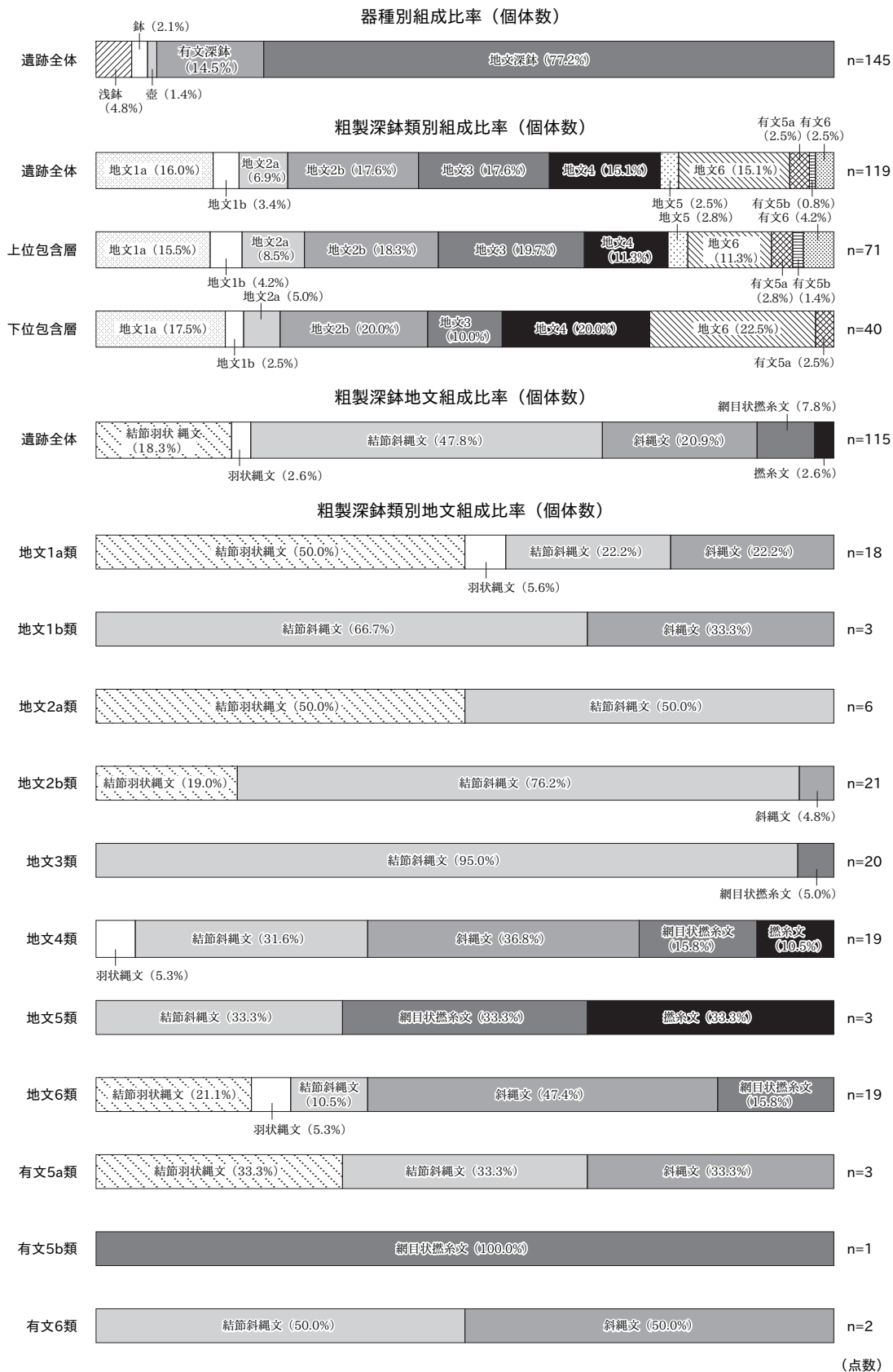
口縁部が残存し分類可能な個体数は119点であり、組成比率は有文深鉢5類が4点(3.3%)、有文深鉢6類は3点(2.5%)、地文深鉢1類は23点(19.4%)、うち1a類が19点(16.0%)、1b類が4点(3.4%)、地文深鉢2類は29点(24.5%)、うち2a類が8点(6.9%)、2b類が21点(17.6%)、地文深鉢3類は21点(17.6%)、地文深鉢4類は18点(15.1%)、地文深鉢5類は3点(2.5%)、地文深鉢6類は18点(15.1%)となり、本遺跡で最も多いのが口縁部の幅広無文帯下に結節回転文が施される地文深鉢2類であり、次いで口縁部に結節回転文帯が施される1類、次いで口縁部直下に結節回転文が施される3類、口縁部に無文帯をもつが直下に結節回転文が施されない4類の順である。このように、本遺跡出土の粗製深鉢は口縁部に結節回転文が施される、無文帯を有する、という点が大きな特徴である。

次に本遺跡の遺物出土状況は東西の帯状分布域において、上位出土と下位出土の二つの分布域に分かれることを前節において確認した。そこで次に上位分布と下位分布における類別組成比率を示す。対象となる土器は帯状分布域出土のもので上位・下位が明確な111点についてである。

まずⅢ期(新)段階の浅鉢(38)が出土した下位分布出土の粗製深鉢についてであるが、総点数40点であり、有文深鉢5・6類は5a類の1点(2.5%)のみ、地文深鉢1類は8点(20.0%)、うち1a類が7点(17.5%)、1b類が1点(2.5%)、地文深鉢2類は10点(25.0%)、うち2a類が2点(5.0%)、2b類が8点(20.0%)、地文深鉢3類は4点(10.0%)、地文深鉢4類は8点(20.0%)であり、地文深鉢5類は出土していない。地文深鉢6類は9点(22.5%)となり、地文深鉢2類が最も多く、次いで6類、1類、4類となる。

Ⅲ期(新)段階からⅤ期直後段階までの有文土器が出土した上位包含層の粗製深鉢は、総点数71点を数え、有文深鉢5類が3点(4.2%)、うち5a類が2点(2.8%)、5b類が1点(1.4%)、有文深鉢6類が3点(4.2%)、地文深鉢1類は14点(19.7%)、うち1a類が11点(15.5%)で1b類が3点(4.2%)、地文深鉢2類は19点(26.8%)で、うち2a類が6点(8.5%)、2b類が13点(18.3%)、地文深鉢3類が14点(19.7%)、地文深鉢4類が8点(11.3%)、地文深鉢5類が2点(2.8%)、6類が8点(11.3%)となり、地文深鉢2類が最も多く、次いで3類、1類、4・6類となる。

上位・下位出土の粗製深鉢を比較すると、上位出土の組成比率は全体の傾向とほぼ同じである。下位出土のものについても地文深鉢1～4類が高い割合を示す点では一致しており、本遺跡の特徴を示している。上位・下位出土土器群の相違点を挙げると、①地文深鉢5類が上位のみからの出土である点、②地文深鉢6類の比率が下位



第 38 図 大沢谷内北遺跡土器器種組成・粗製深鉢類別組成・地文組成比率図

では高く、上位では低い点、③有文深鉢5・6類の出土が上位にまとまる点、である。これらの点から、②からは口縁部の文様帯を意識する傾向が上位で増加していることが窺える。それを裏付けるように、①・③の口縁部を意識した施文がなされる地文深鉢5類や、さらに地文深鉢2・4類の口縁部無文帯に沈線を施す、口縁部文様を強調した有文深鉢5類、粘土紐接合痕をのこしさらに沈線でなぞる有文深鉢6類の出現という、下位から上位への変遷として口縁部強調施文の傾向が窺える。

2) 地文について (第38図)

本遺跡出土の粗製深鉢に施される地文を見ると (第38図)、分類別可能で体部の地文構成が判別できる115点のうち、最も多用されるものが結節斜縄文 (55点・47.8%) であり、次いで斜縄文 (24点・20.9%)、結節羽状縄文 (21点・18.3%)、網目状撚糸文 (9点・7.8%)、撚糸文 (3点・2.6%)、羽状縄文 (3点・2.6%) となっており、結節が多用されている。縄文の原体にはLR、撚糸文にはRが多用されている。

類別で見ると、地文深鉢1a類では結節羽状縄文が最も多く (9点・50.0%)、次いで結節斜縄文 (4点・22.2%)・斜縄文 (4点・22.2%) であり、1b類では結節斜縄文 (2点・66.7%) が多い。2a類では結節羽状縄文 (3点・50.0%) と結節斜縄文 (3点・50.0%) が半々であり、2b類は結節斜縄文が圧倒的に多い (16点・76.2%)。3類も結節斜縄文が圧倒的であり (19点・95.0%)、1点のみ縦位の網目状撚糸文が施される。4類の地文には突出しているものはないが、結節斜縄文 (6点・31.6%) と斜縄文 (7点・36.8%) が目立つ。5類は3点のみであり、結節斜縄文・網目状撚糸文・撚糸文が施される。6類は結節斜縄文 (9点・47.4%) が突出している。有文5・6類は個体数が少ないが、結節を有する原体が目立つ。以上のうちで特徴的な点は、結節羽状縄文が地文深鉢1・2類に集中し、中でも1a類に突出している点である。結節斜縄文が2b類・3類に多用されるのは、分類上、口縁部無文帯下または口縁直下に結節つき原体による結節回転文が施されたものであるため、そのまま体部の地文に用いられている点で肯けるが、1a類の結節回転文帯と体部の結節羽状縄文については意図的な対応関係が考慮されよう。

その他に、地文とは言い難いが器面に調整痕を顕著にのこすものがあり、縦位のケズリ調整痕が明瞭にのこる深鉢 (85・93・118・148・168) がある。ケズリ調整を施した上に地文を施すものと、地文を施した上からケズリ調整を行うものの両者が存在し、地文を施さずにケズリ調整痕のみで地文の効果を出しているもの (93) も存在する。次段階の鳥屋式で盛行する条痕文の採用に関連があるかは不明である。

3) 周辺遺跡との比較と粗製深鉢の変遷について

まず、本遺跡出土土器群と時期が重なり、県内における当該期の標識遺跡とされている三条市上野原遺跡の粗製深鉢の様相は、口縁部に結節回転文帯を有する本遺跡分類の地文深鉢1類・2類が主体的に出土しており、他の類もこれに加わった形で出土している。この地文深鉢1・2類多出の傾向は、上述のように本遺跡と一致している。本遺跡での出土が認められず、上野原遺跡において一定量の出土が確認されるタイプとしては、外に一段肥厚する口縁部に原体を横位施文し、下に結節回転文帯を施文する口縁部片が目立つ [中島 1981 第9図6～13、第17図20・21]。このタイプは渡邊裕之氏の「保明浦タイプ」 [渡邊裕 1998] に該当し、保明浦遺跡 SX2 で鳥屋1式土器と共伴しており [田畑 1996]、鳥屋1式に比定されている [荒川 2009]。本遺跡において保明浦タイプの出土が認められないことは、粗製土器の点からも本遺跡が鳥屋式直前段階の時期にあることを示している。また、保明浦タイプの肥厚口縁は口縁部に粘土紐を付け足して作出するものであり、成形手法としては口縁部に粘土紐接合痕を残す本遺跡有文深鉢6類と類似しており、結節回転文帯は地文深鉢1・2類の属性である。保明浦遺跡の類例を見ると、口縁部と体部の地文は同一であり、撚糸文・網目状撚糸文の場合は口縁部が横位、体部には縦位施文されており、この施文特徴は本遺跡地文深鉢5類と同様である。

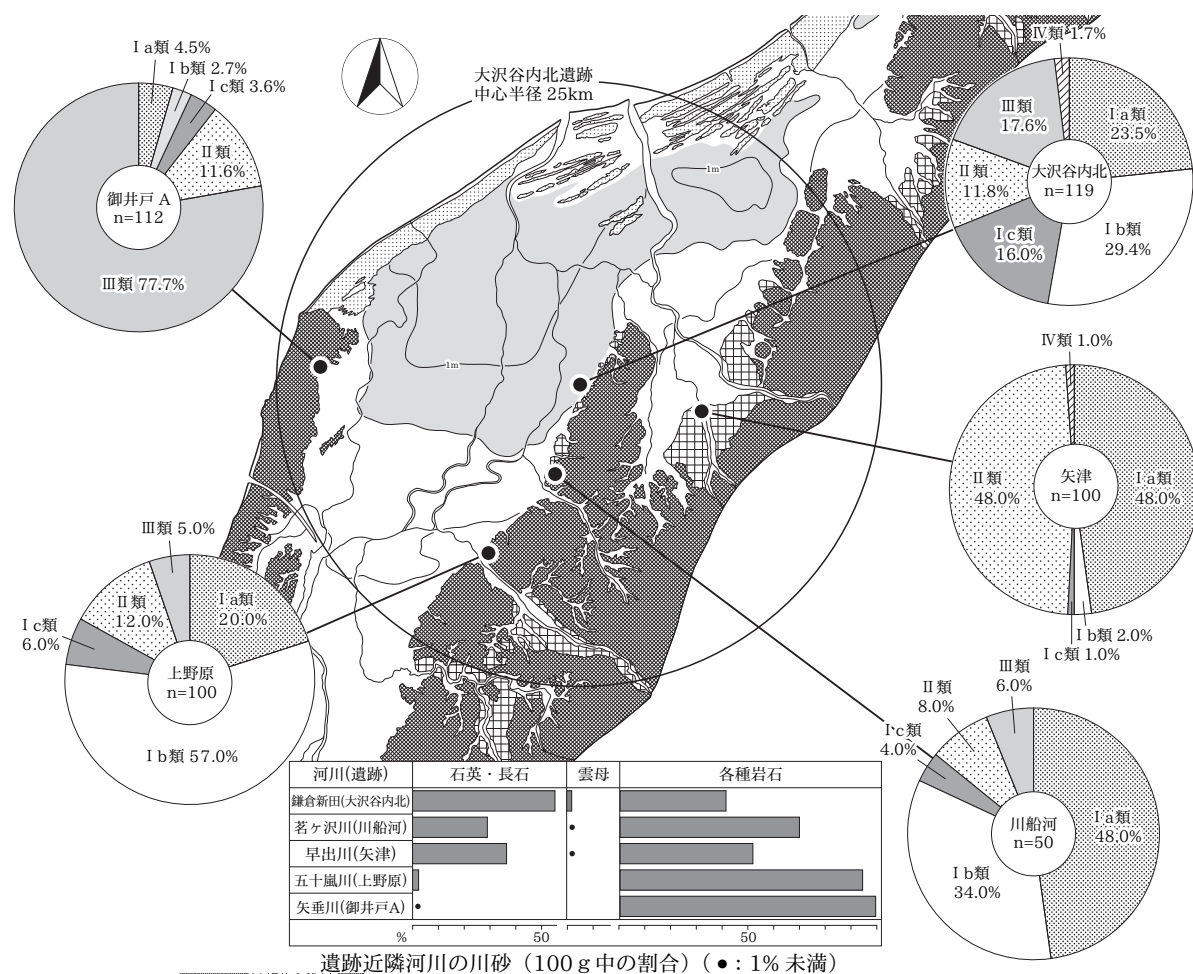
以上の点を考慮すると、保明浦タイプは上野原式段階の粗製深鉢の各属性が融合して成立し、鳥屋1式に盛行した可能性が考えられる。保明浦タイプの認められる遺跡は上野原遺跡・保明浦遺跡・谷津遺跡 [荒川前掲]・鳥屋遺跡であり、これらの遺跡では本遺跡地文深鉢1・2類の、口縁部に結節回転文帯が施される粗製深鉢が認

められる。一方新発田市館ノ内遺跡 D 地点においては保明浦タイプの出土は認められず、本遺跡地文深鉢Ⅰ・Ⅱ類も認められない。このことは保明浦タイプ成立の背景に地文深鉢Ⅰ・Ⅱ類が関与していることを示すとともに、これらに地域性が存在することを示している。阿賀野川流域の鳥屋遺跡・矢津遺跡に存在し、それより以北の館ノ内遺跡に存在しない点から、この辺りが北の境界線と推測する。

4) 胎土について

本遺跡における縄文土器の胎土はバラエティーに富んでおり、第Ⅴ章では肉眼的な観察をつうじ 9 種にわたる区分を行なった。本書に掲載した 266 個体の内訳は、Ⅰ a 類 25.6%・Ⅰ b 類 30.5%・Ⅰ c 類 10.5%・Ⅱ a 類 8.6%・Ⅱ b 類 1.5%・Ⅱ c 類 0.8%・Ⅲ a 類 16.9%・Ⅲ b 類 4.5%・Ⅳ類 1.1%で、Ⅰ a 類・Ⅰ b 類・Ⅲ a 類を中心としながらも分散傾向を示す。本遺跡出土の土器胎土を特徴づける含有物は、磨耗した岩石・石英・長石粒子である。第Ⅴ章ではこれを含むグループをⅠ類とした。器種や文様に基づく分類別にⅠ類の出現率を求めると、浅鉢・鉢・壺類では 30.8%、有文深鉢では 42.9%、地文深鉢では 64.3%となり、いわゆる粗製土器に高い頻度で存在することがわかる。精製土器と粗製土器の間に認める含有率の異なりは、それらが本来生地に含まれておらず、混和剤として混入されたことを物語る。

比較資料として、本遺跡中心半径 25km 圏内に分布する同時期の拠点集落 4 箇所での胎土組成を第 39 図に示す。新潟県立歴史博物館所蔵の矢津遺跡採集土器（落合コレクション）、加茂市民俗資料館所蔵の川船河遺跡採集土器、三条市教育委員会所蔵の上野原遺跡出土土器、市埋蔵文化財センター所蔵の御井戸 A 遺跡晩期中葉包含層出土土器をⅤ章で示した分類基準に基づき集計したものである。提示した数値は、本遺跡を含め地文深鉢に限



第 39 図 越後平野周辺における縄文時代晩期中葉遺跡出土土器の胎土構成と川砂組成

定した。

周辺4遺跡の中で所属時期が明確な資料は上野原遺跡と御井戸A遺跡である。前者は無作為に抽出した口縁部資料100個体、後者は口縁部資料の全てにあたる112個体を集計対象とした。矢津遺跡と川船河遺跡については、遺跡の形成期間が長期におよぶことから所属時期の特定が困難であるが、前者は晩期に属す可能性が高い結節縄文および網目状撚糸文施文資料100個体、後者は晩期地区の採集品のほぼ全てにあたる50個体を観察した。

周辺4遺跡の土器胎土は特定種に偏る傾向が強く、矢津遺跡ではI a類とII a類、川船河遺跡ではI a類、上野原遺跡ではI b類、御井戸A遺跡ではIII a類がそれぞれ50%弱～70%台の高率を示す。各遺跡において特定胎土が多数を占め、なおかつ卓越種が異なる要因として考えられるのは、混和材入手環境の違いである。以下では、本遺跡の土器胎土の位置づけにあたり行った予備的検討の概要を述べる。

御井戸A遺跡を除く4遺跡では、I a類やI b類が高率をもって出現する。これらの指標となる磨耗粒子の一般的な入手方法として考えられるのは河川の川砂を利用したケースであり、各遺跡における近隣河川の砂礫を採取して比較を試みた。採取地は、本遺跡の東1.4kmに位置する鎌倉新田地内の小溪谷、五泉市矢津地内の早出川（矢津遺跡付近）、田上町川船河地内の茗ヶ沢川（川船河遺跡付近）、三条市諏訪地内の五十嵐川（上野原遺跡付近）、新潟市西蒲区福井地内の矢垂川（御井戸A遺跡付近）である。各地点のサンプルは、河床もしくは氾濫原から中型ポリ袋1袋分の砂礫を採取し、5mm・1mmメッシュ篩を使用して粒度別に分けた後1mmメッシュ篩に残った砂粒100gについて石英・長石・雲母・岩石に区分した。それぞれの重量に基づく組成率は第39図下段のとおりである。

5箇所の採取資料にはいくつかの特徴がある。新津丘陵西麓に位置する鎌倉新田地内の溪谷と茗ヶ沢川のサンプルは、付近の基盤層に含まれる砂礫が河川の侵食によって流入したものである。2地点の採取資料は磨耗度の高い鉱物・岩石粒子が大半を占めており、極度に磨耗が進んだ石英・長石が30%～50%台の高率を示す。これと同様の石英・長石粒子は新津丘陵の基盤層に一般的に含まれており、その産状を菩提寺山西麓から茗ヶ沢付近に至る10kmの間の露頭で確認することができた。

早出川・五十嵐川・矢垂川から採取した資料は、上流域の岩相を反映している。磨耗した各種岩石は、矢垂川で稀なほかは各サンプルの中に多量に含まれる。早出川では、上流域に花崗岩が産出することから石英・長石粒子が30%台の割合で存在する。しかし磨耗度は低く、シャープな稜をもった砂粒が主体を占めている。これに対し、五十嵐川と矢垂川では石英・長石がきわめて乏しく、含有率は前者で3%台、後者で1%未満にとどまる。両河川での卓越岩石は、前者が磨耗した泥岩、後者が破碎状態にある凝灰岩である。

周辺4遺跡での卓越胎土と近隣河川の川砂の間には、次のような関係が見られる。石英・長石の入手が容易な矢津遺跡と川船河遺跡では、早出川や茗ヶ沢川の川砂組成に類似したI a類が50%近い割合を示す。前者において高い比率を占めるII類は、意図的に粉碎した可能性が高い石英・長石粒子を多量に含むグループである。早出川の川原にはその母岩となりうる花崗岩の転石が多数存在しており、地理的特性にちなんだ整合関係が見いだせる。石英・長石が乏しいI b類は、上野原遺跡で卓越する。御井戸A遺跡では、凝灰岩以外の混入物が乏しいIII類が75%もの高率を示す。ともに付近に流れる五十嵐川や矢垂川の川砂組成と調和したあり方と言えるものである。

以上のように、周辺4遺跡で主体を占める地文深鉢の胎土含有物は、いずれも各遺跡の近隣で採取できる川砂や転石の状況と類似しており、土器製作にあたりそれらを混和剤として利用した可能性を強く示唆している。これに対し本遺跡では、川船河遺跡と同様の川砂利用環境に置かれているにも関わらず、胎土組成は大きく異なる。近隣の川砂とは異なる特徴をもった混和剤が本遺跡の土器に多数含まれる要因については、二通りのケースが考えられる。砂粒ないしは調整済みの粘土を搬入しこの遺跡で土器製作を行なった可能性はその一つである。しかし、平成19年度の発掘調査区では土器製作の指標となる焼成粘土塊や燃料材の確保に不可欠な磨製石斧が出

土しなかった。後述のように、出土した炭化材の多くは遺跡付近での入手が困難な樹種によって占められる。本遺跡では燃料材の伐採から分割・乾燥に至る一連の作業〔新井 1973〕が行われた可能性はきはめて低く、出土した土器の大半ないしすべてが他遺跡からの搬入品と考えざるをえない状況にある。

本遺跡中心半径 25km 圏内に分布する 4 箇所の拠点集落と本遺跡における胎土のあり方を土器の動きという観点からを比較すると、周辺遺跡との関連性を示唆する次のような特徴が見いだせる。各遺跡の土器を特徴づける 4 種の卓越胎土が本遺跡で 10% から 20% 台の数値をもって共存する現象である。すなわち、Ⅰ a 類は矢津遺跡と川船河遺跡、Ⅰ b 類は上野原遺跡、Ⅱ a 類は矢津遺跡、Ⅲ a 類は御井戸 A 遺跡の指標となる胎土であり、本遺跡における各類の割合が周辺 4 遺跡の胎土を平均化した値に近似する点も注目し得る。これらが仮に各遺跡で製作された土器の搬入品であるとすれば、拠点集落における活動領域の広がりや本遺跡の利用形態を考えるうえで有益な情報をもたらすことになる。

今回試みた検討は、磨耗粒子の有無と石英～長石・雲母・凝灰岩の多寡を問題としており、各種岩石を加えた全体的な組成の把握には至っていない。今後はサンプル数を増やし、水系やエリアごとの混和剤利用環境をいっそう明確にするとともに、各遺跡におけるそれらと土器含有物との厳密な比較や、本遺跡と周辺遺跡間の土器胎土の異同を詳細に検討していくことによって上記のような見方の妥当性を検証する必要がある。さらには、より広範囲にわたる遺跡との比較検討も課題となる。

第 3 節 石器群の位置づけ

本遺跡から出土した石器類は、3,038㎡におよぶ調査面積に較べてきわめて僅少で、石鏃 3 点、同未成品 1 点、磨石・敲石類 7 点、石皿 9 点、剥片 1 点がすべてであった。このうち、Ⅲ d 層から出土した石鏃と磨石・敲石類 1 点ずつについては所属時期が下降する可能性があるため、これを除く資料をもとに石器群のあり方を考える。

A 石 器 組 成

組成比の検討にあたり、石器群を三つのグループに区分しておく。主として食料の調達・加工に用いた A 群石器、工具的な性格の強い B 群石器、非実用的な C 群石器、である。第 15 表に越後平野周辺に分布する主な縄文時代晩期遺跡の石器出土点数を示した。

1) A 群 石 器

越後平野周辺の縄文時代晩期遺跡において一般的に存在する A 群石器は、石鏃、磨石・敲石類、石皿の 3 種である。新潟県内における縄文時代晩期の石器群は、石鏃出土量の増加を大きな特徴とする〔鈴木俊 1998〕。そ

第 15 表 越後平野周辺における縄文時代晩期遺跡出土の石器

遺跡名（所在地）	所属時期	立地	A群石器					B群石器					C群石器					総数
			石鏃	石錘	打斧	磨石	石皿	磨斧	石匙	石錐	石篋	砥石	石棒	石剣	石冠	独鈷	玉類	
道 端（村上市）	前葉	沖積地	4			8	2	1	4									19
埴 塚（胎内市）	前葉	沖積地	7			35		8	2	1	1		1					55
道 下（胎内市）	前葉	沖積地	22			27	1	9	11	5	5	1					3	84
野 地（胎内市）	前葉	沖積地	86			63	5	5	7	15	1	15		2		1		200
青 田（新発田市）	後葉	沖積地	549		20	345	34	44	3	264	3	64		3	2	4	18	1353
村 尻（新発田市）	前葉～後葉	段丘	700			342	8	280	85	180	11	92	79	35	4	1	7	1824
館ノ内（新発田市）	中葉～後葉	段丘	86	1	1	120	45	39	6	9		4	1	3	2	1	1	319
鳥 屋（新潟市）	後葉	砂丘地	13			65	3	15	1	11	1	32		1	4		1	147
六野瀬（阿賀野市）	後葉	段丘	84			49	6	18	8	95		5						265
大沢谷内北（新潟市）	中葉	沖積地	2			6	9											17
上野原（三条市）	中葉	台地	131		2	23	1	18		1			2	1	5	15		200
藤 平（三条市）	後葉	段丘	79	2	5	8	2	14	8								1	118
長 畑（三条市）	後葉	沖積地	37			12	1	11	1	1			1				2	66
御井戸A（新潟市）	前葉～後葉	台地・沖積地	105			24	4	20	2	15			1	1	1		1	174
蒲 田（弥彦村）	中葉～後葉	沖積地	63	1		20	5	9	1	5		1	1	1			1	108
寺 前（出雲崎町）	中葉～後葉	沖積地	7			118	4	12		4		2	2		1			150
藤 橋（長岡市）	前葉	台地	103	4		47	18	37	1	18		26	19	2	1	1	1	278